

平成30年10月1日(月)

三條新聞合流点より

「村だけは天国のような

明るく誇れる村に」

新聞記事や、議会傍聴者から聞いたものから感じたことは、「命拾いした○議員、全く議員資格疑問の政党所属 A 議員」。まず初めの○議員は、最初の委員会採決では賛成したということで、その後、周りから責められ危うく前議員の二の舞いになるところ、かろうじて屁理屈の討論で反対に至り、リンチされずに命拾い。

対して政党所属議員は過去に(大谷時代の疑惑にも)さわらぬ神にたたりなしなのか、特別な質問もなく平穩に過ごしてきた議員活動。

学生時代の議員を知る村民や同級生からは、なんで議員になれたのかとの疑問の声が多い。

もちろん、学生時代の実績とおとなになってからの実績は比較するべきでないのだろうが。父親は温厚、誠実な議員であったと思うが、その後継者として政党はなぜ

氏を選んだのか、もっとまともな人がいたと思うが。

政党幹部にも今後の対応が必要と思います。

感情的なヒステリーの態度だけのものと思われます。二人とも今時限りで議員を去るのだろうが、何とか任期いっぱい安泰になつたと思っっているのだろう。

ただ二人とも(他の議員も)裏には弱みか、故人の事情に付け込んだ援助など、何者かによるツルが巻き付いて身動きできないのは村民多くが知っていることであるが、黒幕もいつまでもそうはしてられないだろう。

いずれ越後一宮様が判断するであろうが、以前はその神様さえも黒幕に操られていたのだから、どのようになることやら。神様を疑問視する小生も地獄行きか。地獄へ行ってもよいから、村だけは天国のような明るく誇れるような村になって欲しい。

(弥彦村の風紀委員)